

関東自然史博物館めぐりレポート・その 1

これまで、野幌のふれあい交流館や札幌博物館活動センターのために製作した展示を紹介してきましたが、今回は趣向を変えて、既存の博物館展示、特に樹脂封入標本を使った展示を紹介したいと思います。オノレの腕もわきまえず、辛口評価でレポートしていますが、興味ある方はご一読くださいませ。自称「北海道一」の調査館の封入標本は、全国で通用するのか——（笑）

はじめに

今までこの通信でもたびたび紹介してきますように、調査館では博物館や自然紹介施設の展示づくりに仕事として取り組んでいます。解説・イラストレーション・パソコンソフト・樹脂封入標本など自作のものを組み合わせて、分かりやすく楽しい展示を目指しています。

最近、実物をプラスチックに封入した標本を活用していますが、聞くところによると樹脂標本を使った展示は最近かなり増えているそうです。しかし、私自身は、道内での展示である旭川博物館と美幌博物館（自作もしている）の標本しか見たことがなく、ぜひ自分の目で最新の展示を見て、展示づくりの糧にしたいと思っていました。しかし、つくるのも手一杯なのに「視察」などというおしゃしなことをする余裕もなかったのです。この2005年の夏、そのチャンスをようやく得て、欲張って3つの自然史総合博物館を見てまいりました。

以下は、ホームページにも掲載予定の博物館の展示見学記です。

■ 今回のターゲット

今回対象としたのは、関東にある3つの調査館通信 27・28号(2006)

博物館。いずれもここ10年以内につくられたもので、特に日本の自然史系総本山たる上野の国立科学博物館（以下、科博）の新館は第Ⅱ期が昨年末にオープンしたばかりである。

- ・群馬県立自然史博物館 1996年展示公開
- ・国立科学博物館 2004年新館Ⅱ期展示公開（新館Ⅰ期は2000年公開、観覧済）
- ・茨城自然博物館 1995年展示公開

いずれも展示内容や展示方法に新しい技術を活用していて、樹脂封入標本も盛りだくさんの博物館である（関東では千葉県立博物館も同様のタイプだが、10年ほど前に見たので今回は割愛した）。展示は自然史全般を扱っており、恐竜の骨格から進化論の解説、地域の自然の紹介まで、幅広い分野について詳しく紹介し、封入標本も背丈以上の大型のものも含め数百点が展示されている。そのようなスゴイものをほんの数時間で見るのは無理があると思いつつ、ツアー客の気分で「2日間で全部見る」という企画で、展示めぐりはスタートした（ちなみにビデオのたぐいと特別展は全てパスした）。

なお、これら3館の展示作成はおそらく全て丹青社（<http://www.tanseisha.co.jp/>）で、封入標本は国陽工芸さんが手がけてい

るものと思われる。霧田気や組み立てはどれも大変よく似ている。

■ 群馬県立自然史博物館 <http://www.gmnh.pref.gunma.jp/>

● 場所 〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1

最初に訪れたのは、上野国・群馬。東京からはちと距離があるが、横浜生まれ・育ちの私でもワングル時代には山登りにしょっちゅう訪れる大変親しみのある土地である。ただ、20年以上も経って思い出が薄れつつあるのか、一人旅で免許も持たない私にとっては、今回の群馬は「不便なド田舎」としかいいようのない土地であった（笑）。

そもそもこの博物館があるのは、私も子どもの頃に行ったことのある群馬サファリパークがある富岡市なのだが、サファリパークは親が車で連れていってくれたからいいが、今の私は地図にポツンと書いてあるだけの博物館にどうやっていいのやら。ホームページの記述を参考に、高崎駅のすぐくはずれにある私鉄の駅（上信電鉄）から車内広告の全くない（オウム信者の指名手



配のみあり）電車に乗り、上州富岡駅で下車した。ここから「乗り合いタクシー」なるものがあるというのだが、時刻表を見るとほとんど走っていない。仕方ないので、行きはタクシー、帰りはてくてく徒歩で戻ることにした。

博物館があるのは、「もみじ平総合公園」という大きな公園で、美術館や運動競技場なども併設されていて県民がまとめて利用できるようになっている。まあ博物館と陸上競技場を同時に使う人はいないでしょうが（訪れたときは競技場では老人たちがゲートボールをやっていた）。周囲は広々として山並みもよく見える気持ちの良い場所で、園内ではツクツクボウシやショウリョウバッタなどの本州の昆虫が懐かしかった。

● 展示の構成と配置

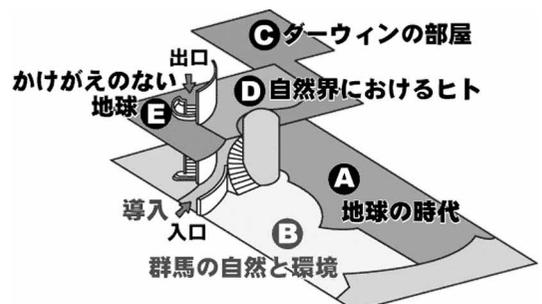
建物は地下1階・地上2階で、展示室は1階と2階にあり、5つに分かれている（図）。最初に入る展示室「地球の時代」は地球誕生からの変化を示したもので、恐竜の巨大模型がクライマックスとなっている。次の展示は地元群馬の自然の紹介、2階に上がると進化の解説と環境問題の解説が見られるという構成になっている。

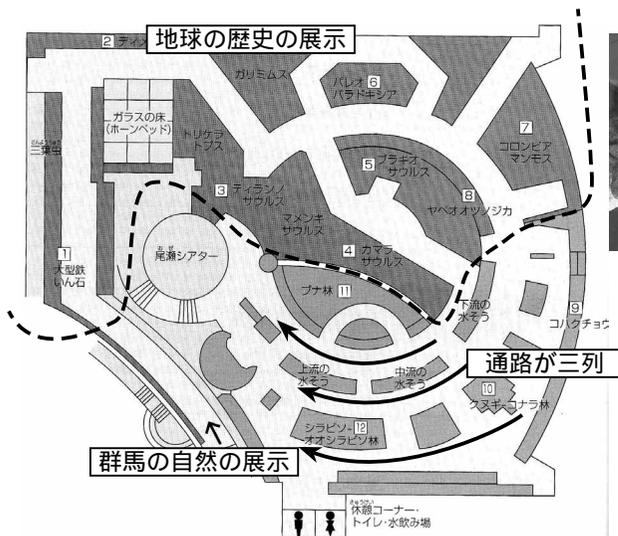
[地球の時代] [群馬の自然と環境]

[ダーウィンの部屋] [自然界におけるヒト]

[かけがえのない地球]

地球の歴史から突然群馬の歴史になると、正直戸惑いもあるが（笑）、群馬の子どもなら違和感ないのかもしれない。2階はテー





マを絞って、より専門的に学習して、まとめをするという意味づけだろう。

展示の配置面でまず気になるのが、順路（動線）の分かりにくさである。特に1階は地球と群馬が同居していて仕切りもないので、群馬の植生図の頭上にティラノサウルスやマンモスがいるような感じで落ち着かない。

また、「群馬の自然」の中も展示棚によって3列くらいに分かれて並行して展示があり、かなりルートが分かりにくい。博物館の順路というのは、大抵分かりにくいものだが、ここのものは特に分かりづらいうように感じた。今回の3館の中でも特に分かりにくいのがここである。というか、このコーナーには撮影のためかなり長かったが、来館者で正しい順序で見ていった人は一人もいなかった。「特に順序にこだわらず見てよい」という考え方もあるだろうが、意図せず見落としてしまうコーナーが多く発生する間取りである。正方形に近い建物に展示を詰め込んでいることでやむを得ないところもあるが、もっと強く誘導しても良い気がする。また、広場のようになっていて中央に目立つ展示があると、「あーシカだっ

（例）」と人はそっちに気を取られてしまうので、周りの壁にある展示は飛ばされてしまう。戻ってみようと思ってもどこから見ればいいのかよく分からなくなってしまっ、立ち去る人も多い。

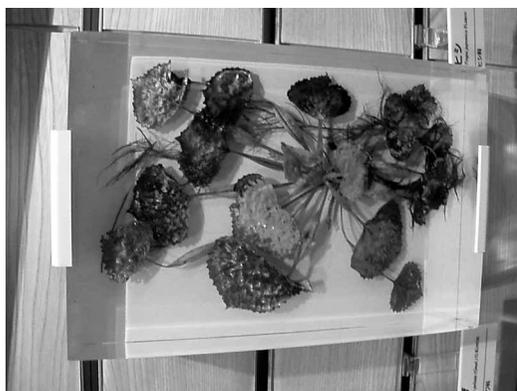
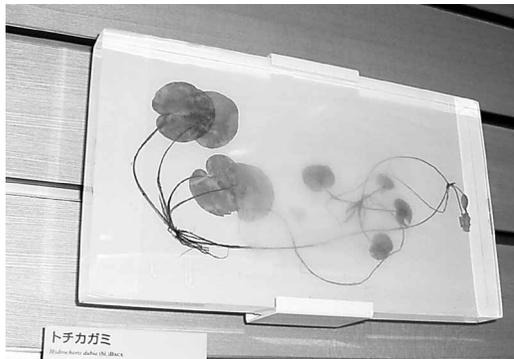
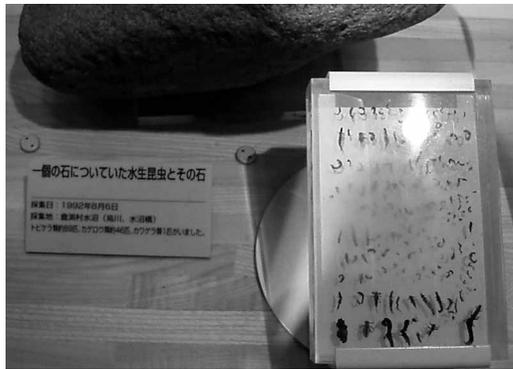


● 樹脂封入標本を使った展示

展示解説によると、ここの展示は「初めて本格的に封入標本を使った展示」とのことだが、確かに大変充実している（点数は462点）。数的には、実は1年早く建てられた茨城もかなり多いのだが、展示の中の位置づけが異なり、ここの方が封入標本がメインとして活躍している印象が強い。

封入しているものは、植物と魚がメインで、貝やきのこなども封入されている。昆虫についてはほとんどが普通の標本で、水

生昆虫だけが封入されている。あくまで封入しないと保存出来ないものを封入したというスタンスだろう。大きさは、一辺が20～30cmというものが標準的でどれも大きい。長さが1m以上のものも見られる。水生昆虫のように小さいものも、数を増やして、これでもかと大きくしている(図)。材料の処理はほとんど全て真空凍結乾燥(フリーズドライ)のようだ。



肝心のクオリティについては、残念ながら、あまりよいとは言えない。博物館報でもその辺の事情が紹介されており(※2003年)、表面にくもりが生じるなどの劣化が8%の標本で見られると報告している。しかも今回見た限りでは、その状況はかなり進行していて、ざっと見た印象でも半数以上に表面が曇ったり、中の材料が白く変質したり隙間が生じたりしているのが確認できた(写真)。せっかくの実物標本であるが、一般の人には「なぜこんなによごれた板が飾ってあるのだろうか?」と思われかねないほどひどいものもある。

さらに気になったのは、植物の標本がフリーズドライで製作されているために、全般にしながら脱色されていることである。正直言って、押し花より状態の悪いものをわざわざ

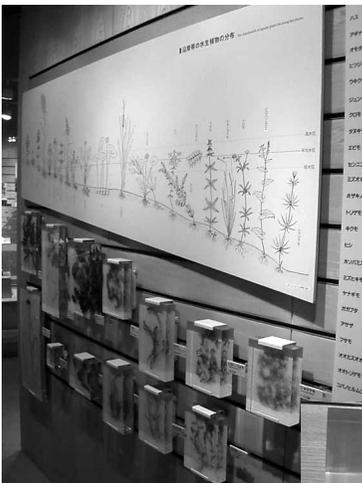


封入しているっぽい展示が多く、冴えない。調査館でも乾燥処理はいろいろ試みているが、植物はフリドラがうまくいかない場合が結構あり、シリカゲルの方がうまくいったりする。その辺はもう一工夫というところか。立体的な雰囲気演出も足りないので、最初から押し葉の標本で良いと思われてしまうものも多い。



標本の見せ方に関しては、ほとんどのものが同じで、壁に固定するか展示ケースに並べて入れるかである。完全固定式なので、手に取ったり、裏側を見たりということは出来ない。固定の仕方も割と無骨な感じがするが、標本の重さを考えるとやむを得ないのかもしれない。私たちが封入標本の売りの一つとしている「手にとって楽しめる展示」(オン・ハンズというべきか!?)という側面はここには全く見られなかった。

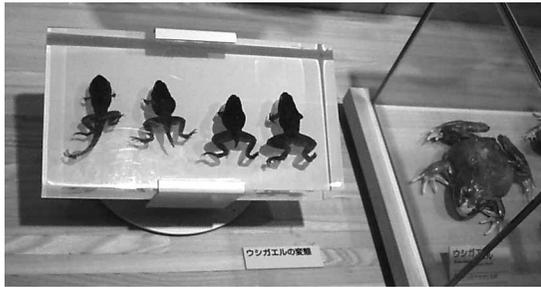
※大森・井室(2003)群馬県立自然史博物館におけるアクリル封入標本の表面劣化と変形、群馬県立自然史博物館研究報告 7:123-126.



以下に実際の標本を紹介してみよう。
・現在私も釧路で企画している水草の展示。上には環境との対応を示したイラストがあり、「同じようなのもうあるじゃん」と思って見たが、教科書のコピーそのままのようなモノクロのイラストはちょっと渋すぎるなあ。しかもその下の封入標本! なんだか位置がいやに低い。床のすぐ上から80cmくらいの高さの壁に固定してある。これは子ども目線のつもりでしょうか、...



子の子の1歳未満の娘の目線よりも下なんですけど...



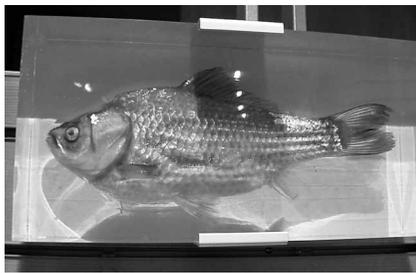
・カエルの封入。出来はいいが、隣のプラスチック（樹脂を浸透させて固くした標本、実物の形状のまま保存できる）との関係がちょっと不明。全く解説がないので、どう扱って（鑑賞して）いいのか分からない展示が多い。



・テナガエビとザリガニ。やっぱり赤くなってしまおうようだ。



・拡大して見せる工夫。こういうのは楽しいです（昔からありますが）。



・魚は、巨大なもの以外は、かなりよい出来。旭川のように目の周りが黒くならなくてもいい。隣に生きている実物があるので、ちょっと負けてしまうが、植物よりはずっとよい。



・唯一動かして見られる展示がこれ。魚の封入標本を筒に入れ、横につけた取っ手でその筒ごと回転させる仕組みになっている。見た目が電気を起こす物理実験の展示みたいであるが（笑）、かなり重くてまわしやすいとは言えない。動かしている来館者もほとんどいなかった。だって魚がひっくり返るだけで意味がないんだもん……





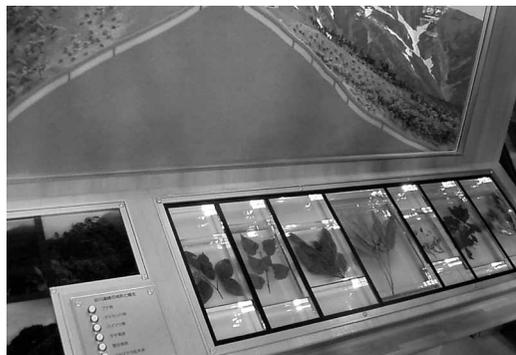
・カタクリの成長段階。ウチでも似たようなのやっていますが、これはかなり大型でした。開花個体は色が悪くちょっと残念。



・珍しく電氣的な仕掛けとのコラボ。季節のボタンを押すと、その季節に咲く花のパネルのバックライトが点灯して、暗闇に標本が浮かび上がる。じっくり観察はしにくいですが、光を当てるときれいに見えるので、雰囲気は良くなっている。



・希少種も封入。「入っているのは栽培品」と断り書き。



・変な高山帯の模型の下に垂直分布と高山植物の封入。旭川のものに似ている。



・ブナの葉の地理変異を大きな樹脂に入れて日本地図などをプリント。樹脂のサイズが無意味に大きい。



・山ごとに植物を封入標本で紹介。ぜいたくです。



・生物ピラミッドを封入標本と剥製で構成した展示。見た目が今イチで企画だおれっぽい感じも。下の方が数多くないので、日本の人口ピラミッドみたいな形になっています。

● その他の展示内容や手法について
後で3館を比較しながら紹介するので、
ここではこの博物館で注目したところだけ。



・地球史のところは、各時代の先頭に柱が立っていて、年代表と当時のミニ地球、環境と生物のミニジオラマがある。フォーマットが統一されていて分かりやすいし、なかなかカッコよい。



・恐竜は肉付けがリアルで自然に動く模型で、自慢げなコメントもついていた。確かにカッコよいのだが、ジュラシックパークなどが散々流行った後だけに新鮮味はちょっとないかも。子どもは大喜びでしょう。(しかし茨城で同じのを見たときはちょっと私も引いてしまいましたが...まあ展示屋さんも各県の子どもに平等ということで(苦笑))。

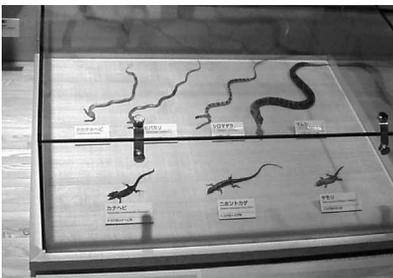


・床がガラス張りで、その下に発掘現場のジオラマが展示されている。床を使った展示は視線を変え、臨場感を与えるものという展示技術としてのコンセプトは分かるもの

の、展示自体の意味は少々分かりづらい。奥にある大陸移動説のジオラマも謎の組み合わせ。



・造形の出来は結構良く、封入標本が見劣りする要因にもなっている。特に植物は不自然さがなくて良かったなあ。



・は虫類はプラスチックネーションのようだ。魚なども含めて出来が良いし、見ていて楽しい。



・利根川の紹介として、上中下流の3つに分けての展示がある。ここには生きている魚が水槽で展示されていた。そのものの展示としてはこれに勝るものはないと思うが、管理は大変でしょうな... 魚の数はすごい多い。



・昆虫は普通にドイツ箱に虫ピンというのが多いが、箱にイラストを入れるだけで展示らしくなっている。昔ながらの展示では、黙々と虫ピンに刺さった虫が並べられている展示が多かったが、あれは展示とはいえないと思う。



・ちょっと怪しいダーウィンロボット。ある意味この展示のシンボルのような。「私はダーウィン。ようこそ…」などと喋る。



・ボウルの中で生態系が完結している。いわゆるバイオスフィアだが、一回絶滅してしまったらしい。個体数の変化が下に書いてある。



・いわゆるインタラクティブ性を持たせた展示で、頭蓋骨の説明がフタを開けると出てくる仕組み。しかし、単に面倒なだけの気もする。さわる動作が意味を成していない悪い例。

● まとめ

いろいろとケチを付けてみたものの、大変充実した展示なのは間違いない。県レベルでこれだけのものがあるのかと感心した。また封入標本やジオラマなどの充実っぷりは「お金かかっているなあ」と感じさせる豪華さだった。ティラノサウルスだけ、みたいな一点豪華主義ではなく、全体に密度が高くさまざまな要素が詰め込まれているのが良いところで、博物館らしい長く楽しめる展示だと思う。

樹脂封入標本については、数と大きさには驚かされたが、ただ機械的に封入して展示している感がぬぐえない。模型・乾燥標本・プラスチックネーション・ジオラマ・生体展示といった技法とうまくすみ分けて、解説に沿った展示となるよう工夫が欲しいところ



である。また、ポリエステル樹脂を使っているため、スケール感がある代わりに、全体に透明感とシャープさに欠け、もっさりした仕上がりである。この辺、詳しくは後編で。

その2では残りの二つの博物館の紹介とまとめ考察を。